2019年度　創価大学法科大学院

B日程　小論文試験

問題１（配点50点）

以下の文章（後記【出典】からの抜粋）を読んで、各設問に答えなさい。

私たちは「世間」の中で生きている。そのことは大人の日本人なら誰でも知っている。しかしその「世間」がどのようなものなのかを客観的に説明してくれた人はいないのである。私たちは自分の人生のある段階で「世間」の中にいる自分を発見し、その中で生きていく知恵を周囲の人々の行動を見よう見まねで学びとりながら自分で考え出して行くしかない。学校教育の中で教師たちが私たちに教えてくれたことは皆建前だけであった。個性的に生きなければならないこと、友情を大切にすること、人には親切にすること、正しいと思ったことは勇気を持って発言してゆくこと、正義は必ず最後には勝利を収めるのだから、確信をもって行動すること、自由こそもっとも大切なものであることなど、これらの教えは皆正しいものであったが、このような行動をするために必要な知恵は教えられなかったのである。今でも子供の自主性を尊重せよとか自由を守ることが大切だといわれているが、一体そのような自由がどこにあるのかをまず問われなければならない状況なのである。いわば我が国の教育は一番大切なことは抜かして建前だけを教えてきたのである。その一番大切なことは自分が「世間」に出たときに解るものとされている。そのことを解っている人を大人というのである。

我が国には二種類の人間がいるといってもよいだろう。建前としての正義や公正の原理を主張する人とそのような主張をする前に正義や公正がどのような条件の下で実現できるかを考えた上でなければ発言しない人である。一般的にいって誰でもこの二種類の人間を自分の中にもっている。私たちはこの二つの立場を常に使い分けながら生きているのである。社会科学という学問の場合はこの二種類の人間ははっきり乖離（かいり）している場合が多い。

建前としての正義を声高に語る人もいるが、それよりも多いのはヨーロッパやアメリカの学者の発言を紹介し、それがそのまま日本に通用するかの議論をする人々である。これは建前論者に入るであろう。彼らはたとえばヨーロッパの事例を紹介し、我が国における個人の弱さについて論じ、個人がもっと尊重されなければならないという。しかしそのためにどうしたらよいかについてはなにも述べていないのである。

ヨーロッパの事例を紹介するだけで意味があると考えるならともかく、我が国における

個人の位置がヨーロッパとは違っているなら、それが何故なのかを解明する必要があるだろう。汚職の問題にしても、住専の問題にしても、薬害エイズの問題にしてもそれらの問題の根底には我が国における意思決定のあり方をめぐる問題が露呈されているのである。通常は建前と本音という形で論ぜられることが多いが、我が国においては何らかの問題を論ずる際に常に建前と本音の相克が見られるのである。その背景として私たちがまず考えなくてはならないのは「世間」の中での個人の位置である。

我が国においては個人は長い間西欧的な個人である前に自分が属する人間関係である「世間」の一員であった。したがって何らかの会合において発言する際には個人としての自分の意見を述べる前にまず自分が属する「世間」の利害に反しないことを確認しなければならない。まず「世間」人として発言しなければならなかったのである。自分自身の意見は本音として「世間」の蔭に隠れていた。「世間」を代弁する発言はこうして個人にとっては建前となり、本音と区別されたのである。こうして「世間」と個人の関係の中で我が国における建前と本音の区別が生まれたのである。

このような建前と本音の違いがくっきりとした輪郭をもって現れたのが明治以降の我が国のあり方、特に近代化、西欧化との関係の中においてであった。明治政府は欧米の近代化路線を採用することを決めた。しかしその際に真の意味で我が国を欧米化することが考えられたわけではなく、少なくとも社会構造や政府機関の組織、軍制や教育などの面での近代化が考えられていただけである。制度やインフラストラクチャーの面での近代化にすぎず、西欧精神の面にまで視線が届いていたわけではなかった。つまり表面の近代化に過ぎず、精神の面では旧来の路線の上ですべてが考えられていたのである。

このような状況の中で我が国特有の状況が増幅されたのである。欧米は圧倒的な文明の力をもって我が国に圧力をかけてきた。それは単に軍事力や合理的な法体制だけでなく、フランス革命を経て身につけた人権理念を表面に掲げたものであったから、抵抗のしようがなかった。明治時代に欧米を訪れた政府の要人たちは欧米の社会の基礎をなしている理念の圧倒的な力に感嘆を惜しまなかった。武力だけの圧力なら抵抗のしようもあったであろうが、否定し去ることのできない崇高な理念が掲げられたとき、その前にひれ伏すしかなかったのである。しかも我が国の現実は欧米とはあまりにかけ離れていた。明治時代に我が国は国を挙げて欧化政策に取りかかるしかなかったのである。しかし欧化といってもそれは法政や行政構造、産業、教育制度などに限定され、人と人の関係のあり方にまではとうてい及ぶものではなかった。欧米諸国は近代化以前に数千年の時間をかけてその準備をしてきたのであり、我が国が欧米化路線を採用したとしてもわずかの時間にそのすべてをたどることができるはずもなかった。また当時の政府の要人たちも精神の面まで欧化しようと考えていたわけではなく、いわば和魂洋才の道を模索していたのである。

文明にせよ、文化にせよ、最終的にはその根幹に人と人の関係の特異なあり方がある。新しい人と人の関係のあり方が生み出されたとき、新たな文明が誕生する条件が生まれたことになる。明治時代に我が国は欧米の諸制度を取り入れながら、結果としては人と人の人間

関係については従来の形を残すことになった。そのような決断を明治政府がしたわけではない。圧倒的な欧米の近代的諸制度を前にして身も魂も奪われてしまいかねない状況の中でかろうじて踏みとどまったというべきであろう。こうして我が国特有の状況が生まれた。国家の体制と法制、経済の諸制度、教育体制などは欧米に範を得て一応近代化されながら、一人一人の人間の生き方の点では従来の慣行が維持されたのである。

この状況はしかしやや複雑であった。なぜなら当時欧米を訪れた人々は欧米の近代的個人のあり方に感嘆し、我が国の個人のあり方に不満を漏らしていたからである。欧米の個人のあり方を理想とする人々も少なからずいたのである。しかし我が国は結果としては従来の個人のあり方を変えることはなかった。こうして近代的な枠組みの中に従来の個人のあり方だけが生き残ることとなった。

従来の人と人とのあり方とは一言でいえば「世間」のことであり、「世間」が生き残ったということなのである。「世間」とは古来日本人の世界観の一部をなしており、本来山や川、海や風などの自然界の出来事をも包含するものであり（器世間）、後世になって人と人の関係のあり方を意味する（有情世間）ようになったものである。近代的な諸制度の中に伝統的な人間関係である「世間」が生き残ったことはその後の我が国の諸問題に深くそして決定的な影響を残すことになった。政治や経済の諸問題だけでなく、法や教育の面においても欧米の影響は大きかったから、これらの諸問題については常に欧米に範が求められていた。欧米の個人のあり方は当時の知識人を捉えてはなさなかったし、明治以降の我が国の体制の中では欧米に範をとった近代化路線が主流をなしていたから、政治家も学者も文化人も公的な発言をする際には常に欧米流の内容を主として発言していたのである。

しかしひとたびその内容が発言者個人の生き方に関わる場合には複雑な事態となった。なぜならそこには「世間」が生きていたからであり、公的な発言をするものは常に自分の生き方と離れて別な次元のこととして話をしたのであり、自分の「世間」に関わらないよう用心していたのである。

こうして建前と本音の世界の区別が生まれたのである。人々は公的な発言をする際には常に欧米流の内容を主として発言し、公的な場を離れたときには自分の「世間」に即して本音でしゃべったのである。明治以降我が国はこのようにして理念の世界と本音の場の世界との二つの極をもつことになり、特に知識人の場合はその相克は深刻なものがあった。

大切なことは当時も今も「世間」は隠されていたことである。人々は自分が「世間」に私的生活の足場をもっていることを隠してあたかも建前の世界だけで生きているかに振る舞ったのである。「世間」はこうして隠されたのである。そのことは言葉としての「世間」が公的な文書から消え去り、日常会話の中でのみ生き残ったことに示されている。明治十年頃にソサイエティーの訳語として社会という言葉が定められたとき、「世間」という語は公的な舞台から消えていった。人々はあたかも「世間」が存在しないかのように振る舞うことになったのである。しかし私的生活領域を基礎とした「世間」は私たちの生活の中できわめて大きな部分を占めているから、「世間」の中で生きている人間としてうなずけないことに対

してはうわべはいかに従うかに見えても強固な反対の意志が隠されているのである。

我が国の近代化がもたらした最大の問題がこうして生まれた(1)。以後今日まで人々は政治、法制、教育そのほかのあらゆる分野において二重生活をやむなくされたのである。言葉は言葉それ自体として受け止められず、その背後にある真の意図が常に探し求められるようになった。発言の真意とか趣旨といわれるものがそれである。ある人が公的な場で発言した場合、その発言がその人の私的生活領域に根ざしたものであれば信用されるが、そうでない場合はただの言葉として受け止められるに過ぎず、疑いの目で見られることになる。本音とはその人の公的でない、私的生活領域に根ざした発言をいい、「世間」に根ざした言葉として信用される。

明治以来私たちは欧米の個人があたかも我が国に存在しているかの幻想の中で生きてきた。したがって「世間」の存在を言葉や行動の中で否定してきたのである。しかし私が見るところ我が国の人々、特に知識人といわれる人々は全く意識していないが、それぞれの「世間」の中で生きており、自己の存在自体が、その「世間」に依存しているのである。我が国の知識人は一人になったことがなく、自分が自分の「世間」に依存していることに気づいてもいないのである。だから時に外国に出張し、一年くらい滞在することになったときにそのことが露呈されることがしばしば起こる。

たとえば出張している人のところに大学から何らかの要請が届けられることがある。そのようなときにその人は日本にいたときと同様な振る舞いが出来ないことが多いのである。彼は外国にあって日本の「世間」をしばし忘れて暮らしている。そのようなときに日本の「世間」から要請が届けられる。それは忘れていたかつての桎梏(しっこく)が再び押し寄せてくる予感を与えるのである。そのようなときに怒ったり、喜んだりして返事を書くと致命的な誤りを犯すことになる。日本にいたときには自分では意識せずに「世間」の規範に沿って行動し、語っていた人が、「世間」が見えなくなった外国ではその規範もなくなり、自由に行動し、書くことができるのである。そのようなときに彼は平衡感覚を失い、極端な行動に出がちなのである。日本の知識人は一人になったときに危ういのである。

このような社会において大人になるということはどういうことだろうか。大人とはなによりもまず「世間」を知っている人をいう。「世間」とは大人が互いに結んでいる人間関係の絆を意味し、それは人によって少しずつ異なっているが、多くの場合、それは年賀状を交換したり、お中元やお歳暮を交換したりする関係である。「世間」を構成する人たちの間には何の定款もないが、互いに一つの「世間」に属していることはよく知っているのである。「世間」に属している人はその仲間の葬儀には原則として列席しなければならない。「世間」を構成している人々の間には年賀状やお中元お歳暮の交換という義務があるが、この義務の背後には互いに何らかの世話をするということがある。同じ会社に属している場合には引き立ててもらったり、有利な条件で関係を持つことができることもある。同窓会はそのような意味で「世間」の代表的なものである。先輩後輩の間で互いに助け合う関係が生まれる

のである。

このような「世間」は同時に他の「世間」に属している人たちと競合する関係を持っている。政党の派閥を見ればその関係はよく解るであろう。単に競合するだけでなく、時には差別を助長する関係ともなる。「世間」は排他的で、差別的な関係なのである。

このような「世間」からなる社会で大人になるということは容易なことではない(2)。子供はまず大人が建前の世界で生きていることを知ってしまう。明治以降設立された学校は欧米の制度をまねて作られたものであり、その意味では建前の世界のものだったのである。しかしその制度には単に建前であったといってすましてしまうわけにはいかない重要な面があった。

たとえば学校においては身分差別は否定されていた。被差別部落の子弟でも学校においては他の子供と机を並べて学んだのである。これは建前の世界がもたらした積極的な面である。学校ではこうして身分差別は否定されていたが、現実の社会の中に存在している差別については口をつぐんでいたのである。そのような意味でも学校は建前の世界であった。

明治以降我が国の教育は基本的に欧米の制度を範として行われたが、その際に我が国固有の文化は教育の対象にはならなかった。つまり西欧的な観点から日本の社会が描かれ、西欧的な個人があたかも我が国にも生まれているかの前提の上で教育が行われたのである。「世間」は今に至るまで我が国の教育の対象になっていないのである。子供たちはある年齢になると大人の世界が建前の世界であることを知り、建前と本音の使い分けを学んでゆく。こうして子供たちは大人になってゆくのである。

【出典】阿部謹也（著）『「教養」とは何か』（講談社現代新書、1997 年）より。

※なお、小論文試験の出題に合わせ、中略やルビ・仮名遣い等の文章表現に変更を加えている。

【設問１】

筆者は日本社会における「世間」をどのように述べているか。筆者の言葉を用いて150字以上200字以内で論じなさい。

【設問２】

下線(1)における「最大の問題」とは何か。筆者の言葉を用いて200字以内で論じなさい。

【設問３】

筆者が下線(2)のように述べているのはどうしてか。「大人とは何か」について触れながら、筆者の言葉を用いて300字以内で論じなさい。

問題２（配点 50 点）

以下の会話文を読み、夫と妻のどちらを支持するかについて理由を３つ挙げ、相手の反論も考慮しながら自分の考えを論じる文章を書きなさい。
（指示する理由を３つ以上挙げてもよい。ただし、結論に対して少なくとも３点の理由を文中で明示すること）。
なお、本問は架空の設例であり、法律の知識を問うものではない。また、文章の形式（意見書や上申書など）に留意しなくてもよい。

妻：ねえ、あなた、息子のカズヤも小学校に入ったことだし、私もそろそろ働きに出たいのだけれど。
夫：働きに･･･？パートタイムでスーパーのレジ打ちでもするのかい。
妻：いえ、私、家事が得意でしょう。近所の奥様から「家事代行サービス」で働いてみたらって誘われているのよ。時給も 1600 円と割高だし、家事なら苦もなくできるし、ちょうどいいかなと思って。
夫：へえ、まあ、息抜き程度に働くくらいならいいんじゃないの。
妻：いえ、息抜きというより社会復帰したい気持ちなのよ。私の家事が社会においてどこまで認められるか試してみたいから、平日の 5 日間、毎日 3 時間はしっかり働いてみたいと思っているの。そうすれば、月に 10 万円くらい稼げるのよ。
夫：え、平日毎日かい？そんなに働く必要ないじゃないか。今だって俺の給料でも十分やっていけるんだろう？
妻：確かにあなたのお給料でも今は問題なく生活できているわ。でも、カズヤが中学・高校と私立に進学するかもしれないし、マイホームを持つ計画だってあるじゃない。私が今から働けば、そのお給料を教育費としてもマイホームの頭金としても使えると思うの。お金はないよりあった方がいいじゃない。
夫：確かにお金を稼ぐことは悪くないけど、でも、今この時である必要あるか？カズヤだって小学校入りたてで下校時間だってまだ早いだろう？誰もいない家に帰宅させるのは可哀想じゃないか。
妻：そこは働く時間を上手く調整するわよ。たとえば、働く時間を午前中に設定することは可能だと思うわ。
夫：いやいや、働くってそんなに甘くないぞ。毎日働く時間帯を変更することなんてできないだろう。そうなれば、少なくともカズヤが留守番しなきゃいけない日だってでてくるだろう？
妻：確かに、カズヤに留守番をお願いすることもでてくると思うけど、それでも１～２時間よ。カズヤだって一人で留守番くらいできるようになっているから心配ないわよ。
夫：いや、たとえカズヤが留守番できたとしても、カズヤがお腹をすかして帰ってきたと

きに、お前がいなくてご飯がないというのは可哀想じゃないか。

妻：大丈夫よ、カズヤにお昼ご飯が必要な時は朝にきちんと用意しておくつもりよ。

夫：そうはいっても、カズヤがまだ小さいのに家に母親がいないのは教育上よくないんじゃないか。

妻：あら、世の中には働くお母さんがたくさんいるわよ。母親がお家にいないことだって珍しくないのに、教育上よくないだなんて言い切れないでしょう？それに、一日中いないわけじゃないわよ。長くても、せいぜい１～２時間よ。

夫：いや、世間の働いている母親のことを言ってるんじゃなくて、我が家のことを言ってるんだよ。現状、俺の給料で問題がないのに、あえて今お前が働きにでる必要があるかってことを言いたいんだよ。

妻：だから、我が家の将来の貯蓄のためだって言ってるじゃない。それに、私が家にいるだけじゃなくて、社会でどれだけ認められるのか試してみたいのよ。せっかく近所の奥様が良いお話を持ってきてくれている今がチャンスじゃない。

夫：近所の奥様の「家事代行サービス」の口利きなんて、今しかないわけじゃないだろう。

妻：いいえ、こんな時給のいい仕事はめったにないわよ。あとね、私が働きに出ることを前提に、カズヤのことよりもあなたのことを話したいのよ。もしも、私が働きに出たら、あなたにも家事を分担してもらいたいと思っているの。

夫：えっ！どういうことだよ。

妻：今まで私は専業主婦で家事の一切をやってきて、あなたに働きに出てもらっていたけど、今後は私も働きに出るからあなたも少しは家事を手伝って貰いたいのよ。

夫：ちょっとちょっと、勘弁してくれよ。俺はお前の完璧な家事があるからこそ、外でバリバリ働けてきたんだぜ。俺は家事なんか全然できないよ。無理だよ。

妻：いいえ、これを機会にあなたも生活力を身につけるべきよ。あなたも少しくらい家事ができるようにならないとダメよ。私が病気になって入院･･･なんてことになった時に慌てても遅いのよ。

夫：いや、ちょっと待ってくれよ、ということはなんだ、お前はよそで家事をやって、我が家の家事はやらなくなるってことか。なんだそれ。一体それに何の意味があるんだよ。

妻：我が家の家事を全くやらないわけじゃないわよ。いくつかあなたにもやって欲しいって言ってるだけじゃない。そうね、掃除とか洗濯とかでいいわよ。今まで私が全部やってきたんだから、あなただって少しはやってよ。最初は時間がかかってもしょうがないじゃない。

夫：毎日働いて疲れているのに、家事なんてできるわけないよ。掃除や洗濯すらお前みたいにきちんとできないし、お前がやった方が短時間で完璧にできるじゃないか。やっぱり働きに出るのはやめてくれ。我が家の家事をせずに、他人の家の家事をするなんてばかげてる。月 10 万円くらい、俺が残業増やして頑張ればいいんだろう。それくらいやれるし、逆にモチベーションになるよ。

妻：違うのよ。お金も大事だけど、私が社会復帰したいのよ。

夫 : とにかく聞いてくれ、アリストテレスは「人と役割の適合が正義である」と述べたそうだ。人は生まれつき家事をやるにふさわしい人間もいれば、肉体労働にふさわしい人間もいれば、政治を行うにふさわしい人間もいる。その人にふさわしい役割を適合させることが正義だと言ったそうだ。働くにふさわしい人間、家事にふさわしい人間がいるんだよ。これまで通り、お前が我が家の家事をやって、俺が外で稼ぐ。これが正義なんだよ。

妻 : なに急に妙なこと言い出してるの。アリストテレスが何なの？女は家事をやるにふさわしい人間だから、自宅で家事だけやれってわけ？私が働きたいという意欲はどうしたらいいのよ。それに、あなたの言うアリストテレスの理論でいうなら、私が「家事代行サービス」で働く方が私にふさわしい役割なんじゃないの？それが正義なんじゃないの？

夫 : それはお前だけでみた役割の適合であって、俺の役割を考えていないだろう。我が家の中での役割分担で考えてみろよ。お前が家事にふさわしい、俺が働くにふさわしい、カズヤが小学校に通うのがふさわしい･･･だろ？

妻 : くだらない。家族のふさわしい役割分担を検討する前に、あなたがやるべき家事の役割分担を考えて欲しいわ。